

同志社大学卒業論文

2005 年度

真の防犯パトロールとは

河原町・木屋町パトロール隊とガーディアン・エンジェルスのパトロールから探る

文学部 社会学科 社会学専攻

指導教授 立木茂雄 教授

学籍番号 12022012

本多和憲

目次

序論...P1

1 河原町・木屋町パトロール隊とガーディアン・エンジェルスにおける基本情報...P2

1, 1 立誠 河原町・木屋町パトロール隊について

1, 2 ガーディアン・エンジェルスについて

2 河原町・木屋町パトロール隊とガーディアン・エンジェルスにおける物語...P4

2, 1 街路の所有者たち

2, 2 街路の守護天使たち

3 考察...P24

3, 1 街路の所有者たちとガーディアン・エンジェルスのパトロールにおける違い

3, 2 街路における防犯

3, 3 青少年のより所

3, 4 人々の模範となる

4 結論...P30

序論

現在京都の木屋町には、毎日夜七時から翌朝七時まで警察の機動隊が夜を徹しての防犯パトロールが行なわれ物々しい雰囲気である。

私は大学一回生のときから木屋町で飲み歩きそして遊び、と様々な人との出会いや経験を積んできた。しかし、いつも感じることは、初めてくる人にとっては歩きづらいまちであると感じた。それは性風俗店の呼び込みが絶え間なくいることや、暗がりが多いと言う点があったからである。実際、三条と四条間の木屋町通りを歩くと 20 名ほどの呼び込みに会うことが少なくない。京都観光へ来る人々が京都の夜の町に落胆してしまうことが少なくないようである。

また昔からの老舗の飲食店も、景観の悪化などの都合で店をたたむと言うこともあるようである。

私はこれらの事実から木屋町の景観を考えていきたいと考え、はじめは今から十年前に廃校となった立誠小学校を新規性風俗店の出店を押しやるために、再度学校としての認可を受けた事実からこの街づくりについて考えようと思っていた。そして様々な活動に参加した。性風俗店を排除するにはどうしたらよいのかを考える会議への参加、立誠消防団という木屋町や河原町に住む人々で構成されているパトロール隊における防犯パトロールへの参加、またそのパトロールで出会ったガーディアン・エンジェルスでの防犯パトロールへの参加をした。これらの活動において参加していくうちに、河原町・木屋町に住んでいる人びとのパトロールとガーディアン・エンジェルスでのパトロールにおける方法の違いがあるのではないかと感じた。それは、河原町・木屋町パトロール隊は警察が行なうような一方的で抑圧的なパトロールを行なっているように感じられた。一方、ガーディアン・エンジェルスでは、木屋町や河原町にいる人びとに対して、声を掛ける、会話をするというコミュニケーションを基盤とした防犯パトロールを行なっている。つまり、ガーディアン・エンジェルスは人びととの会話をし、相互作用により防犯に繋げるという役割をしていると考える。これらの異なる防犯パトロールを行なっている二つの団体の方法を比較し、有効性を検証していきたいと考える。

1 河原町・木屋町パトロール隊とガーディアン・エンジェルズにおける基本情報

1.1 立誠 河原町・木屋町パトロール隊

立誠 河原町・木屋町パトロール隊の実施団体は立誠自治連合会と防犯推進委員協議会から成り立ち、そのほかの参加団体は少年補導委員会、ガーディアン・エンジェルズ京都支部、飲食店関係者、中京消防署、五条警察署、中京区役所などで構成されている。パトロール参加者は参加団体の役員及び地元有志を含め、50、60歳が中心となり、参加人数は約40名から50名ほどである。そして、治安の向上を目指したパトロールを実施している。木屋町などでは近年、治安の悪化、ごみの不法投棄、不法駐輪など様々な問題を抱えている。そのため地域住民が主体となり、関係機関と連携して「安心・安全でにぎわいのあるまち」という目的の元、取り組みを開始した。

具体的な対策として第一に、不法駐輪対策は、近年、大量の自転車が路上に放置され、通行障害や景観の悪化を引き起こしているため、快適に歩くことができるまちを目指して、地域ぐるみで啓発活動を行い、放置自転車やバイクなどの撤去を行なっている。

第二に、不法投棄対策は不法投棄が後を絶たない木屋町・先斗町界隈において、美しく魅力あふれるまちを目指して、11月には夕方から深夜にかけて地域、行政、事業者が一体となって不法投棄防止の街頭啓発、監視及び指導を行っている。

第三に、立看板撤去対策は性風俗関係者、主に呼び込みをしている人に対して、看板を出すことを制限するという旨のチラシを配ることで抑制を図る活動を行なっている。

(立誠自治委員会より)

1.2 ガーディアン・エンジェルズについて

ボランティア団体、ガーディアン・エンジェルズは米国で誕生。「犯罪防止に主旨を置き、犯罪を許さない社会作りを目指し」「安全を提供する」世界的な組織であり、「セーフティ・パトロール＝安全を提供するために街を巡回する防犯パトロール、安全教育などの活動」により、「コミュニティー・サービス＝地域への奉仕」を行なう団体である。

創始者はカーティス・スリワ。彼はイタリア系母とポーランド系父との間に生まれた。1976年ニューヨーク、サウス・ブロンクス地区で、マクドナルドの夜間店長であった時によく店の前の清掃を行っていたが、次第に清掃範囲を自分の店の店員と共に広げていった（この頃ロック・ブリゲートという名前であった）。

当時この活動の拠点となるマクドナルドが安全だったこともあり、犯罪被害者の駆け込み寺となったことや街の要望もあったことから、1979年マグニフィセント・サーティーン（勇敢な13人）と名前を変え、非武装パトロールや地下鉄のパトロールも行うようになった。この名前は日本映画の「七人の侍」を米国版にリメイクされた「マグニフィセント・セブン（荒野の七人）」の影響があったようである。次第に献身的な活動に参加する人々に共感し、メンバーは増え300人に上ったと言う。

マグニフィセント・サーティーンでは全体像を表現することは出来なくなり、街での「あなた達はまるでガーディアン・エンジェルのような声や、カーティス・スリワが通っていたカトリックスクールの名前が偶然にも同じであったので現在の名前に至るのであった。

日本ガーディアン・エンジェルズ

日本ではニューヨーク本部長を5年務めた、小田啓二により日本に設立された。当時ニューヨーク市本部長をしていた彼が、1995年の地下鉄サリン事件に疑念と憤りを感じ、日本に一時帰国をした際、地下鉄有楽町をパトロールを行なったことがマスコミに取り上げられた。また日本の安全神話が崩れた年でもあり、人々のボランティアに対する考えの変化等の世論の後押しを受け、1996年2月11日にアジア地区最初の支部として日本ガーディアン・エンジェルズが国際支部として認定された。

事業については「特定非営利団体法事人日本ガーディアン・エンジェルズ定款」よりの抜粋を行なう。

（抜粋）「第五条 この法人は、第三条の目的を達成するため、次の事業を行なう。

（1）特定非営利活動に係る事業

犯罪・非行を防止するためのパトロール

住民による地域安全活動の支援

子供・青少年の健全育成に資する行事の実施および支援

生活の安全に関する知識の普及

生活の安全に関する学術的な研究・調査

生活の安全に関する国際交流・国際協力」

(後略抜粋終了)

(『日本ガーディアン・エンジェルス ハンドブック 2004』より)

2 河原町・木屋町パトロール隊とガーディアン・エンジェルスにおける物語

私は、平成 17 年 8 月 5 日から同年 11 月 25 日まで、河原町・木屋町パトロール隊及びガーディアン・エンジェルスに所属した。この期間の活動を一日ずつフィールドノートに記録した。この二つのパトロール内容を掲載し、またどちらのパトロールが有効であったかを第 3 章で検証していきたいと考える。

2.1 街路の所有者たち

木屋町が抱える問題

私が度々通っている高瀬川沿いの喫茶店にコーヒーを飲みに行きマスターと話しているうちに今の自分の卒業研究が木屋町を題材としたものを書きたいと話したところ、現在立誠自治会で防犯など町おこしの活動を行っているとの話を聞いた。その日にマスターが連絡を自治会長の方にとっていただき、すぐに会うことが出来ることとなった。そして自治会長の方とお会いし、まちの人々との話し合いに出席するとともに月に一度行われる警邏パトロールに参加することになった。今日は自治会長の方と話すだけとなった。しかし、やはり最初の自治会長さんとの会話は学生だから論文を書くため、あまり関わらないのではだろうかという感覚で話されていた。

そのためなぜ自分が木屋町を選んだのか等自分の思い入れを話したことや私が大学の後輩であることなどで、納得したためか和やかに現在の活動状況を聞いた。

自治会長「以前までは、風俗を排除するとばかり町内の人たちが言うてはったが、実際

はかなり範囲があつてね。だから性風俗だけにしぼって減らしていきたいと
思います。でも実際性風俗を完全になくして、昔のようになったら人が来な
いようになる。だからある程度は残すと言うか、共存する道も考えなあかん。
そこが難しいんだな。」

自治会長は顔をしかめてコーヒーを飲みながら言った。

「そうですね。キャバクラなど目当てで来ている人がいることは否めない点でもあります
ね。後は僕自身としては落書きも気になりますね。」と私は苦笑いを浮かべながら返した。

自治会長「そうそう、落書きも問題ですね。うちの家の壁にも前はよくやられてたから、
壁に絵を書いてもらったんですよ。帰りに是非見てってください。うちの壁
は童話作家の女性の方に書いてもらったんだ。でも壁が大きいからかなりか
かったよ。」

自治会長「実は私はこの自治会長の任期があと少しで、時期が来たら違う人と交代しよ
うと思っているんですよ。だから私も本多君も最後まで関わることは出来な
いが、君がまた十年後でも京都に戻った時にあの時関わってよかったと思え
るようにしたいね。あ、話は変わるけど警邏のほうはキャッチには僕らが注
意するとややこしくなるから、五条警察の方と一緒に回るからその人に伝え
て注意してもらってください。」

その後彼の家の壁の絵を見せてもらうことになり、後ろを付いていった。家は三条通り
と六角通りの間にある細い筋を木屋町通りから河原町通りに向かい歩いていくと、河原町
通りにほぼ面している家にたどり着いた。その家の白い壁には子供たちが公園か広場で遊
んでいる微笑ましい絵が描かれていた。私が絵を食い入るように見て「きれいな絵ですね。」
と話した。

自治会長「これで2,30万くらいかかったよ。」

彼は恥ずかしそうに話し、別れを告げて帰った。

河原町・木屋町パトロール隊に所属する人々それぞれの木屋町への思い

夜になっても京都特有の蒸し暑さが体を覆う。木屋町には夕方から飲んでいたであろう
人々が、高瀬川沿いで赤い顔をしながら楽しげに歩いていた。昼間高瀬川沿いの木陰ベン

ちに座りながらゆっくりと過ごす人々とは違い、巣へ帰る鳥のように次々と各々の次の店を探しているビルの狭い入り口へと消えていった。

前日に2週間前お会いした自治会長さんから連絡があり、有志を募り木屋町界隈を見回る立誠消防団の団員の方達が、夜9時半に立誠小学校正門の北側の通りに集合しているから行けば会えるとのことを聞き、集合場所に来た。すでに、警邏パトロールを行うらしき人々が続々と集まっていた。そこには年齢層が20代から70代ほどまでの男女が見る限りは30人以上いた。とにかく人の多さが印象的であった。また夜のネオン街にこれだけの人が集まっている光景は、この活動を知らない人々にとっては異様なことに違いない。自分自身も圧倒されているうちに警邏の開始時間となった。

立誠消防団の団長「では、今からパトロールを開始します。それではグループを分けたいと思います。」

この警邏を行っている立誠消防団の団長のような眼鏡をかけた少し華奢な男が、話していた。その後団長らしき男は木屋町から河原町へ繋がる小道の名前を言い、付け加えるように続けて人の名前を言った。どうやら一つの通りにつき一人のリーダーが固定されているようであった。名前をあげられた10人弱が前へと出てきた。その後私を入れた40人ほどはランダムに振り分けられ、一つの通りに約5人程度の小隊で見回ることとなった。私のグループは男子学生、中年男性会社員、主婦、リーダーと言うよりは責任者のような初老の老人であった。全員夏と言うことや、機能性を考えたジーンズにTシャツにスニーカーといったシンプルな装いであった。

男子学生はおそらく私と同じ卒業論文やレポートなどのためであろうと思われた。

中年男性や主婦の方はおそらく自分の子供が高倉小学校に通い、立誠小学校グラウンドを使用するため、見回りをしているように見受けられた。

初老の男性は見たところおとなしそうで感じのよい老人だが、立誠自治会の会議の際、性風俗は必ずなくしたいとよく主張していた。

この4人と見回りが始まった。今回は六角通り周辺を巡回することになったこの通りはキャバクラや性風俗の呼び込みよりも、違法駐輪が多く、通行しにくいと問題となっている場所である。そのため自転車を駐輪している人に対する注意、及び整理する作業を行った。その作業を行いながらそれぞれに接触していくことを試みた。まず一人目はちょう

ど近くで作業していた主婦の方と話してみることにした。

「自転車がこんなにあると歩きにくいし、つまずいたらもっと危ないですね。」と苦笑いをしながら額の汗を手で拭い話しかけた。

主婦「そうよね。ここがもし発展したとしたら、今以上に自転車の乗り入れも激しくなるだろうしたいへんかもね。」

彼女は困ったような顔をしながら、仕方がないと思ったのだろうか諦めの顔で無理やり笑顔を作った感じで話した。

「それも問題ですね。そこの部分も考えないとどうしようもないですね。このまんまじゃ、いたちごっこになるな。何かいい方法はないんですかね」私も彼女と同じ表情をして返した。

主婦「そうね。何かいい方法ね。」

彼女は話しながら方法を考えているようであった。その後黙々と作業を続けていた。

夜であっても無風で体にまとわり付く暑さがさらにこのメンバーたちの違法駐輪に対する苛立ちを募らせる。確かに違法駐輪はしてはならないが、少し険悪な雰囲気になりすぎている。

「木屋町をテーマパーク、例えばディズニーランドみたいにしちゃえばいいんじゃないんですかね。」となんとかこの作業を楽しくと言えば語弊になるが、雰囲気を変えたいと思ったのでつい軽く言ってしまった。

主婦「それいいわ。そうしたら自転車も入れないし、ごみも減る。風俗もなくなる。いいね。」

中年男性「なかなかいいですな。ここがそうなれば子供を遊園地に連れて行くより安上がりやな。」

中年男性が自分の言ったことを自分で笑っていた。しばらく自転車を移動させた後、私のほうを向いた。

中年男性「ところで、君、大学生。」

彼は自転車を移動させる手を休めて聞いた。

「そうですよ。」と笑顔で返した。

中年男性「じゃあ、大学の研究できているんですか」

彼は前に何度か他の学生にも質問したような感情のこもっていない単調な話し方で聞いてきた。

「それもありますけど、僕は3年間ここで遊んできて、卒業する前に何かこのまちに貢献できることがやりたいってこともあってはじめたんですよ。」と私も作業をやめて笑顔で彼の顔を見た後、私は真剣な表情で話した。

中年男性「そうか。木屋町を愛してるな。」

中年男性「そういえば君はメモを取ったりしてないね。最近学生が多く参加していて、たまに作業中や見回りをしている最中に後ろのほうでメモを取りながら歩いている子が多いんだよ。だから一緒にやっているよりかは、取材している感じでちょっとやりにくかったな。」

彼は苦笑しながら頭をかいて話した。

もちろん私もメモをとっていたが、彼らにすれば気になることは当然であると思っていた。だから、わたしがメモを取る際に気をつけたのは、自分が覚えられるだけ覚えた後、見えないところで書くようにしていた。このおかげと言っては悪いが、彼が学生に対する不満に近いものを学生である私だけに教えてくれたという収穫を得ることが出来た。

ここで私は彼に一つ質問を試みた。

「今の木屋町から風俗が無くなったらどうなるんですかね。」私は、唐突に思いついたことを軽く口にしたように聞いてみた。

中年男性「あの学校に子供を行かせる親にしてみれば排除して欲しいとは思わ。」

彼はきっぱり言い放った。しかし続けるように

中年男性「ただ、今このまちに来ている人全員じゃないけど、ある程度の人はずれが目当てで来ている人もいるし、無くなったら活気が無くなりそうだな。特に飲食をこころでやってる人は意見も半々やろな。」

彼は困った顔をしながら答えた。

初老の男性「あんなもんは必要ないですよ。」

初老の男性が口を開いた。

初老の男性「ただ普通に暮らしたい。それがここに住む人たちの考えていることだと思いますよ。」

彼は穏やかな表情で話した。自転車を動かすことはかなり重労働なので少し自転車のサドルに手を置いて休んでいた。どうやら私と中年男性との話を聞いていたようだ。

初老の男性は暗がり作業をしていたので表情が見えなかった。最初、彼が話しに割って入ったときは私が中年男性に聞いた質問にたいして怒っているのではないかと思ったが、そうではない様子だった。確かに繁華街に住む人と足を運んでいく人には大きな違いがある。

中年男性の方は初老の男性に聞かれてしまったことを後悔しているのか、ばつの悪そうな顔をして私と老人の元から離れたところへと作業を行いに行ってしまった。

初老の男性「自治会のほうでは、今風俗をなくそうと話合っている。私はここで商売はしてませんよ。だからこういう言い方になるんでしょうね。」

老人はTシャツの首元や脇を汗でぬらしながら首に巻いてあるタオルで顔を拭きながら話した。私も彼の顔を見ないように自分の通っている店の看板を眺めていた。すると私と知り合いのバーテンダーとたまたま出会い、挨拶だけを交わした。

初老の男性「今の君を見ていると、相当遊んでいますね。」

老人は面白い発見をしたような私に少し興味を示す様子で再び話しかけてきた。「そうなんですよ。大学1年のときから遊んでるんですよ。」と老人の期待する反応に応えるように含み笑いを浮かべた。その後私は彼と一緒にバイクなどの移動を行うと、ちょうど一時間が経ち、再び集合場所に帰りその日は解散となった。帰りは蜘蛛の子を散らすという表現が合うようにそれぞれの家路へと戻っていった。その後私は高瀬川を望むいつもの喫茶店へ行き今日の出来事をマスターと話した。

ガーディアン・エンジェルスとの合同パトロール

今回もまた夜9時半に立誠小学校北側に集まった。今回は主に40代や50代が多く、赤のベレー帽をかぶったガーディアン・エンジェルスもそこにいた。私が彼らを見ていると、以前一緒に見回りをした初老の男性が私のもとへ寄ってきた。

初老の男性「2年ほど前から京都にできたNPOの団体みたいだよ。」

前回、彼と話をしたのでだいぶ軽い口調で話してくれた。

「そうですか。以前までは木屋町みらい21というNPOがやっていると聞きましたが、

今は違うんですね。」

初老の男性「あれはもう今はないんですよ。なくなった理由はわからないんですが、まあ今はガーディアン・エンジェルズさんがいるんで良いと思いますよ。」

彼はいかにも去るもの追わず、来るもの拒まずと言った様子で淡々と話していた。

今日の見回りは前回と違い全員で列を成して見回りを行うこととなった。集団で固まっていたものがどんどん列を形成し始め、見回りが始まりだした。そして初老の男性がそそくさと先頭へと小走りで向かい始めた。私は彼の背中を見ながら、一番後方のガーディアン・エンジェルズがいる方へと向かうことにした。

白いTシャツに赤いベレー帽、私にとっては懐かしく思えるものがあつた。渋谷で未成年の少年少女に終電までに帰るようにとやさしい口調で促し、路地裏などでの覚せい剤の売買を見張るなどの行為を見たことがあつた。私がこの見回りの警邏隊の中で若いこともあり、すぐにガーディアン・エンジェルズの一人の男性に声をかけてもらうことが出来た。

ガーディアン・エンジェルズ「大学生。」

彼は興味津々な様子で話しかけてきた。

私はそうだと返答し、なぜ見回りに参加しているのかなどの経緯を話した。

彼はほうほうと頷くと、また続けて質問をしてきた。

ガーディアン・エンジェルズ「僕らがやっとなるガーディアン・エンジェルズはどんなにか知ってます。」

彼は少し不安な顔つきで聞いた。どうやらガーディアン・エンジェルズは京都の人には浸透していないのではないかと思った。私がもちろん知っていますよと答えると表情から不安の色が消えますます誇らしげな顔になっていた。続けて渋谷での活動は知っていることを告げると、少し表情が強張った。今日は雨が夜に降り出したので人の数も比較的まばらで静かであったので、彼も私との話しに付き合ってくれるのだらうと思いながら話し始めるのを待った。

ガーディアン・エンジェルズ「僕らはまだ始まって2年くらいしかたってないし、メンバーも少なくてテレビでよく見るものより毎日行うことが出来ないんですよ。」

話を聞いているとどうやらこのメンバーの方々の多くは社会人がほとんどで、東京・渋

谷のガーディアン・エンジェルスのように毎日夜中から朝方までの見回りパトロールを行うことが出来ないようだ。

彼になぜガーディアン・エンジェルスに入ったのかと聞くと。

ガーディアン・エンジェルス「Dare to care あえて世話する。ってゆう精神に惚れたところもあるね。あとはガーディアン・エンジェルスは地味な仕事があるけど、やっていて、ああこのまちを、京都を守っているんだなって思うんだよ。」

彼は少しまわりの人たちに聞こえないように小声で話した。

今日は放置自転車の数も少なく、またキャッチと呼ばれる呼び込みも雨のため出ていない。閑散としている中を行列になって歩く、後方にガーディアン・エンジェルスが付いている。村おこしのためにしたが人気のない大名行列のように思えてしまった。この日は雨もあり、周りのパトロールをする人々は口数少なく黙々とパトロールを続けている。

ただ、ガーディアン・エンジェルスだけが通りを行き交う人々に対して声を掛けていた。一時間もかからないうちにパトロールは終了し、それぞれ家路へと帰った。

ガーディアン・エンジェルスの方々はまたかたまって今日のミーティングを行っているようであった。私も先ほど話しかけてくれた彼に別れを告げ帰ることにした。

2.2 街路の守護天使たち

私をはじめ、立誠自治会におけるパトロールやまちづくりにおける会議に参加してきたが、次第に木屋町での防犯に興味湧き、立誠自治会のついででガーディアン・エンジェルスに入隊することとなった。事前のガーディアン・エンジェルスから私の携帯にメールが来ていて、彼らの活動は主に金曜日と土曜日の夜9時ごろから夜中の2時までの週2回のパトロールを行なっているという主旨の内容が送られてきた。

誰にでも笑顔で話しかけることによる防犯

最初の連絡で言われた通り、私は夜9時半に四条大橋の近くにある交番で待ち合わせをした。

私は待ち合わせの 10 分前に着くと、交番の横の先斗町のほうから「こんばんは。」と行き交う人々に笑顔で挨拶をしながら、赤いベレー帽をかぶり、英語で赤字のガーディアン・エンジェルスと書かれた白地の T シャツに黒のカーゴパンツを履いた 3 人組がやってきた。無表情でいると物々しいが、笑顔で話しかけている姿を見ると親しみを覚える。

私がおのれたちに近寄り話し掛けた。

隊員 A「本多さんですか。初めまして私は京都支部長の隊員 A と申します。パッとみると怖そうですが、そうでもないんでよろしくお願ひします。」

隊員 A「今日は私たちとパトロールを一緒にして、入隊する気があるのなら最後にまた確認しますのでお願ひします。とりあえずこれからミーティングをミニパークで行うので付いてきてください。」

と話し、彼らが来た道を引き返し再び先斗町に入っていった。彼らは常に声を掛けながら歩いている。私が不思議そうに見ていた。すると。

隊員 A「この光景ちょっとおかしいでしょ。こんなに声を掛けて何すんのって思うでしょ。これはですね。常に声を掛けていると向こうから困ったときにこちらに相談しやすくなるし、私たちガーディアン・エンジェルスはまちを歩いている人たち一人ひとりに対して、ちゃんと見てますよ、関心を持ってますよっていう意思表示になるんですよ。だから地味な仕事ではあるんですけど、これをやっていくことで犯罪を未然に防げるっていうことにつながるんですよ。」

話しているうちに彼らの言うミニパークに到着した。四条から三条のちょうど中間地点にあり、先斗町に接する明かりの少ない小さな公園が彼らの集合場所であった。

まず今日のメンバーは私を含めた 4 名で先ほどから私に話してくれていた隊員 A、隊員 B、隊員 C であった。パトロールを行う前にメンバー全員の体調の報告、今日のまちの状況、各々が武器を持っていないかの確認のための身体検査、パトロールの道順の設定など細かなミーティングが行われた。

ミーティングが終了し、パトロールが始まった。

歩く人々すべてに声を掛ける。キャッチと呼ばれ、普通の人から疎まれる人々にも声を掛け「暑いね。ワイシャツ脱ぎたいでしょ。」などと気軽に声を掛け、立ち止まり普通に会話をする。また向こうからも声を掛け、「お疲れ様です。」と労いの声さえ掛けてくれる。

これらの光景は立誠自治会のパトロールとは 180 度違っていた。

次に置き引きが起きるといわれる鴨川に行き、座っているカップルに声を掛け、置き引きに対する注意を促す。また、ストリートミュージシャンたちには風邪を引かないようにと声を掛け、酔って座り込んでいる学生たちには「飲みすぎたな。ちゃんと家に帰りなよ。」と親しげに話をする。

また通りすがりの若者たちが「かっこいいな。」と言うとすぐに近寄り、自分たちがしている活動や名刺を渡して「困ったときは連絡してね。」と宣伝活動を行っていた。

私が行動を共にして気づいたことだが、彼らは行動一つ一つにおいて用語をつけている。例えば自分たちが道を歩いているときに後方から自転車が来たとする。そのとき「QR右。」と言う。するとメンバー全員が右による。

これは Quick Response の略で、行動の迅速化をはかるためのシグナルコードであることや、「おい、後ろから自転車が来たからどう。」などという自転車で乗っている人の気分が悪くなってしまふことに配慮するための意味もあると言う。ガーディアン・エンジェルスの行動はしばしばこのような用語が使われている。

次に信号を待つときである。壁に背中をつけ、周りを警戒する。これはいつ何時襲われても迅速に対処できるために行っているそうだ。彼らほとんど背中を見せない。壁がないところではメンバー同士が背中を合わせてお互いを守る。このように行動が徹底されている。

続いて彼らの休憩である。休憩は 10-3 (テン・スリー) と呼ばれる。彼らはパトロール中と休憩を明確にわけ、メリハリを付ける。休憩ではパトロールの話は一切しない。なぜなら誰が話を聞いているかわからない。そして彼らは本名で話をするとはほとんどない。そのため最初に表記したメンバーの名前はコードネーム、つまりあだ名である。会話は映画や自分の好きなことの話などであった。

ここまで行動していて私が気づいたことは、上下関係がないということである。

隊員 A 「このチームには絶対的なリーダーはいない。また上下関係もないです。年齢も関係ない。ただ経験値の差があるだけです。だから回りに気を使わずに遠慮なく、見があれば言っているんですよ。」

隊員 A 「ただ、パトロールごとにリーダーも変わりますが、別に誰が偉いなんてことは

ないですよ。」と続けて話した。

隊員 B「本多さんも遠慮しなくていいよ。それにこの活動に強制的に参加しろとも言っていないし、無理はしないでな。僕らはこの活動が好きでやっているし。」

休憩が終わり、再びパトロールをしながらミニパークへと戻った。最後にもう一度ミーティングを行った。内容は今日の反省で、次のパトロールに生かす内容を話すことであった。

例えば「今日はお疲れ様でした。隊員 C です。今日はあまり声を掛けても返事が返ってくるのが少なかったなので、次回はもっと一人一人と会話をすることによって重点をおきたいと思います。お疲れ様でした。」といったことを一人ずつ話しをしていくことである。

平成 17 年 9 月 26 日、立誠自治会の会議で話し合われていた警察官による木屋町パトロールが始まった。木屋町から河原町へ抜ける細い通りに一つの通りに二人の警察官が配備されていた。そのせいか木屋町での人通りが減っているように思えた。

ガーディアン・エンジェルスへのそれぞれの思いとところざし

前回と同じ夜 9 時からのパトロールである。この日はまず以前集まったミニパークに再び集合した。今日のメンバーは以前と同じ隊員 A、隊員 B。そして大学生の隊員 D とわたしであった。全員ガーディアン・エンジェルスの格好に着替え再び集合し、ミーティングを行ってからのパトロールの開始となった。

パトロールを行う際にはパディと呼ばれる二人一組となって行動する。私は隊員 D とパディとなった。

隊員 D「ダーホン（私のコードネームである）は格闘技の経験はある。」

隊員 D は当たり前のように聞いてきた。彼は私より一つ年下であるが、かなり体格が良い。私はその経験がないことを告げると

隊員 D「いざとなれば逃げればいいよ。」

ガーディアン・エンジェルスに入っている男性メンバーのほとんどは何かしら格闘技、例えば空手や古武術を習っているようだ。また応急処置などの訓練、講習などに参加しているようであった。

私が通行人の人たちに挨拶をしていると隊員 D は私の声がよく通っていたことや物怖

じしないことがわかったのか、よく話しかけてくれていた。

隊員 D「前に、暴走族に殴りこみかけたやつがいてさ。なんか勘違いしているやつがいたけど、ダーホンは違うよね。たまにへんな正義感かなんか知らないけど、ちょっとおかしなやつがいたんだよ。で、今日は新しく入った子が来るって聞いたからどんなのがくるかと思ったけど、ダーホンみたいなのでよかったよ。」

三条の鴨川周辺をパトロールする際、

隊員 A「橋の下をくぐる時は、頭上も注意してください。何でかって言うとね、日本ではないけどアメリカのほうでは僕らの活動をよく思っていない人がいるみたいで、橋の上から物を落としてくる人がいたようだからね。」

一通り回っていると、歩いている人と顔見知りになることが多い。通行人の方から積極的に声を掛けられる。

「お疲れ様ですね。」とねぎらいの言葉を掛けられる。

隊員 A はほとんどのパトロールには参加している。彼は普段は刑務官で医療を行う仕事をしているようで、よく刑務所での珍事件を休憩時間に話している。

隊員 A「刑務所で医務官をやっているといつもありえないことがあるんだよ。そうだなシャンプーを飲み込んだやつがいるんだよ。でさ、その処置なんだけど、どうやると思う。とにかく水を飲ませて、ギャグにしか聞こえないだろうけど、みんなで足を持って逆さにして振るんだよ。で、ゲーゲー吐かせるんだけど、蟹みたいにシャンプー飲んだもんだから、泡をぶくぶく吐くんだよね。」

彼はメンバーに笑い話を提供し、和ませている。

続いて隊員 B に関しても隊員 A と同じ調子でパトロールに参加している。彼は専門学校に通いながら、整骨院で勤務している。彼は親父ギャグつまりダジャレをよく言い、隊員 A とともにガーディアン・エンジェルスとの和み役となっている。

隊員 C は大学生であり、日本風のアクセサリなどを好み、常に身に付けている。また剣道、スポーツチャンバラ、居合を習っており自身で剣術の流派を作っている。

活動はいつもと同じようにミーティングで始まり、パトロールは町の人々に挨拶をしながら巡回を行った。普段からパトロールの最中は私語が少ない。この日は私語という私語は 10 - 3 (休憩) までなかった。

隊員 A「あまりだれていると周りから見ていると、そこ（だれている所）が目立ってしまうし、私たちを見ることに寄って安心を提供することが出来なくなってしまうので、あまり仲間内でパトロールの際は話さないで欲しい。だけど休憩のときは仲間でいろいろ話してどんどん仲良くなってくださいな。」

隊員 B「この格好（赤いベレー帽に白いTシャツ、この時期には赤いジャンパーを着用）は目立つからな、へんなこと言う様だけど、下手な行動が出来ひん。だからな自分らの行動一つ一つにな、気を付けなあかんねんな。」

隊員 C「でもこの服とベレー被ってて、『かっこええな』って言われるとめちゃくちゃうれしいうすよね。『だせーな』なんて言われたことないですよ。」

隊員 A「そうそう。よく河原町、特に蛸薬師通りら辺のうんこ座りしている子達に言われるね。あっちから『兄ちゃん達かっこええな』ってね。そんで（ガーディアン・エンジェルズに）入るかって聞くと『考えとくわ』って言われるな。でもね、ああいう子達を引き入れることによって、どこか投げ所みたいなものを作ってあげることによって、非行に走るのを防いだりすることが出来るんですよ。」

隊員 B「まだそういう子は入って来ないんやけど、これからその子達が入ってくるようになれば、防犯に繋がると思うから、もっと活動していかなとな。」

隊員 Bも隊員 Aと同じ考えを持っているようであった。

メンバー間における役割

今日のメンバーは先週と同じであった。隊員 A、隊員 B、隊員 C である。いつものように着替えを終え、ミニパークへ集合し、ミーティングから始まる。その日のまちの状況で各々が気になることを話し合い、パトロールを行なうコースを話し合う。木屋町通りは、9月中旬からの警官による夜間パトロールがあるため、人も少なく問題があるとすれば夜11時以降に酔っ払い（ガーディアンの人々はDSと呼び泥酔者を表す）がたまに出るくらいであると話し、その代わりに木屋町の暗がりの多いところや、寺町、新京極通りなど人通りが少なく、かつ、引ったくりが出る可能性があるかもしれないと言うことでそこを重点的に巡回することとなった。

今日のパトロールリーダーは隊員 A が隊員 C を指名した。パトロールリーダーは先頭に立ち、仲間の状況や周りを警戒、指揮などをする重要な役割である。緊急事態が起こった場合、リーダーが混乱してしまうと全体に影響し処置が遅れると言うことに繋がるため、他のメンバーから認められない限りはその役割に付くことはできない。

パトロールが始まるとすぐに隊員 C が「パンパン」と手を二回叩く、これは止まれと言う合図である。すぐにメンバーの動きが止まり、隊員 C に注目する。どうやら公衆電話にピンクチラシが貼られていたようで、隊員 C が「隊員 A お願いします。」と言うと隊員 A がすぐにはがす作業を始め、他のメンバーは彼の背中を守るように彼に背を向ける形で彼を囲んだ。作業が終わるのを確認すると隊員 C は「パン」と手を一回鳴らし、再び巡回を開始するという合図を出した。道行く人々に「こんばんは。防犯パトロールです。」と声を掛けながら巡回した。再び 11 時頃に木屋町を巡回し、今日のミーティングでこの時間帯に DS が出るかもしれないという心配があったが、幸い無いことを確認すると隊員 A が「腹減ったから、10 - 3 (休憩) をとりましょうか。」と話すと、隊員 B、隊員 C が「行きますか。」と安どの表情を浮かべ、休憩を取ることとなり食事を取った。新京極あたりのサイゼリヤで休憩を取った。

隊員 A 「今日は意外と静かだな。まあ、何にもないことが一番いいですね。」

隊員 B 「ダーホン。パトロールでは隊員 A さんとか隊員 B さんとか『さん』で付けなくていいよ。これはコードネームだからね。パトロール中も遠慮なく、別に敬語とか使わなくていいからさ。」

隊員 C 「僕も最初そうでしたよ。何か探り探りなところもありましたしね。慣れるまでが大変なんですよ。」

隊員 C がしょうがないですよというそぶりで話していた。

隊員 A 「まあ、コードネームを付けることによって違う自分を演じるって言ったら言い過ぎかもしれませんが、普段の自分とは違う楽しさを味わえますからね。だからニックネームみたいなものだし、別に呼び捨てにされてムカッとくる人はいないでしょ。」

隊員 C 「今日のパトは僕がリーダーでよかったですけど、前はテンパりましたよ。だって、初めてリーダーやったときにいきなり木屋町でけが人が出たんですから。」

僕かなりあせりましたよ。」

隊員 C が話を変えるように話すと。

隊員 A 「あの時は隊員 C で大丈夫かなと思ったんだけど、意外に冷静だったからね。よくやっていたと思いますよ。」

隊員 A が隊員 C に対しよくやりましたねといった褒める形で話した。そんな話をしながらみんなで互いの頼んだ食べ物をつつきあっていた。

今回はこれまでのパトロールとは違い、木屋町・河原町合同パトロールであった。これは、立誠消防団（木屋町パトロール隊）と一緒に行なわれる。

私はガーディアン・エンジェルスとして参加した。ガーディアン・エンジェルスのメンバーは隊員 A、隊員 D、見学できた S さん（後に隊員 E）であった。

河原町・木屋町合同パトロールとガーディアン・エンジェルスの方法の相違

午後 9 時ガ - ディアン・エンジェルスのカラズ（ユニホーム）に着替え、立誠小学校へと向かった。学校前には警察車両が二台置かれ、その中には警察官が詰め込まれているといった物々しい雰囲気であった。そこでガーディアン・エンジェルスはいつものようにミーティングとメンバーが武器を携帯していないかの確認作業を行った。この作業を終え、小学校の中へ入り一つの教室へと誘導された。

教室の中でまず目に入るのは、青いジャンパーに「木屋町・河原町パトロール since 2005」と書かれた自治会の人たちが着ているものであった。次に警察官である明らかに体格が大柄な人々が目立っていた。教室に入ってすぐのところに立誠自治会の会長が座り、その周りに自治会の方が座っていた。そして右奥にはスーツを着た五条署警察の課長や副署長が座っていた。私たちは彼らが座っている円卓より外のいすに座るよう促された。しかし、隊員 A だけが円卓のほうへ座りにいった。

はじめに自治会の会長が話した。

自治会長「今回のパトロールでは、性風俗店の看板の自粛や勧誘に対する注意を促していきたいと思います。」

続いては警察の課長の挨拶である。

警察の課長「先週から木屋町・河原町・祇園界隈における我々の 24 時間体制でのパト

ロールが始まりました。そして今日皆さんとの合同パトロールをご一緒させていただくことで、さらにより相乗効果が得られ、京都が安心して暮らせますよう努力したいと考えております。」

五条署副所長も先ほどの課長と同じコメントをし、開会式なるものが終わった。

パトロール開始となる前に自治会のほうから参加者全員にチラシが束で配られた！看板を自粛してください」「歩いている人へ声を掛けることはやめましょう」といった 2 種類のビラであった。隊員 A はガーディアン・エンジェルスメンバーからもらったビラを自治会の人びとが先にパトロールに向かっていく姿を確認してから、回収した。

隊員 A 「私たちはやらなくていいですよ。」

と話し、パトロールを行なう列へと向かった。今回は列を成して、木屋町と河原町の間にある細い通りを回っていく。

立誠自治会の方たちは、キャッチや性風俗の関係者に次々とチラシを配っていった。それに対しガーディアン・エンジェルスはいつも通りに街を歩く人々に対し挨拶をし、また風俗関係者にも気軽に声を掛けていくが、向こうからの対応がいつもと違う。疑問に思ったので隊員 A に聞いてみると。

隊員 A 「合同パトは性風俗やキャッチに圧力を掛けるようなもので、その方たちとパトをしていると私たちの今まで築いてきた関係が崩れてしまう。だから、私たちは中立のような立場であることを分かってもらうために、私たちからビラは配らないんですよ。」

合同パトロールはビラを配ると言う作業を 1 時間半程して終わった。

一端、パトロールを行なったメンバーが小学校北側の橋へ集合し、解散となった。

ガーディアン・エンジェルスはその後ミニパークへと戻り、10 3 (休憩) を取った。その後隊員 A がメンバー全員の体調を確認し、1 時間ほどのパトロールを行なった。

隊員 D 「合同パトはやりすぎだな。あんな強引にビラ配ったら、けんか売っているのと同じだな。だから隊員 A も俺らに配らせなかったのかもな。」

木屋町・河原町パトロールとロゴの入ったジャンパーを着た人たちがバラバラに解散し、そのままの格好で飲みに行っている。

隊員 D 「あの格好で飲みに行くと、酔っ払ってたら、パトロールして注意している意味

がないよな。」

隊員 A「確かに、誰が見ているか分かりませんからね。酔っ払って、キャッチの人たちに捕まって、お姉さんが居るお店に連れてかれて、パトロールに意味がなくなっちゃうかもしれませんね。」

と話し、合同パトロールは終了した。

自らを律する

今回はパトロールではなく、メンバー同士の親睦会が行なわれた。しかし、場所は四条ではなく、繁華街から離れたところで行なわれた。

今回の飲み会の幹事は隊員 B であった。集合場所にはすでに隊員 A と隊員 C が居た。隊員 C はサイズの大きい服とアクセサリをジャラジャラと言わんばかりに付けていた。ガーディアン・エンジェルスのパトロール時のドレスコードは政治色の強いものや暴力的なデザインをしたものは付けてはならない。ということさえ守れば、後は自由である。

しかし、今回は親睦会なので、服装は自由であった。次にやってきたのは、隊員 F。隊員 F は女性で大学生をやっている。早稲田から同志社に留学でやってきたようである。次に隊員 E、隊員 B がやってきた。まだメンバーはいるが、今日はこのメンバーで親睦会が行なわれる。

焼肉屋での親睦会となった。まずは私と隊員 E の歓迎する乾杯で始まり、それから、ここで談話が始まった。私は隊員 C と話した。隊員 C は居合い、剣道、スポーツチャンバラなどを習い自流の剣術を開いた。

隊員 C「居合いはただ切るだけ、剣道ではやってはいけない突き方などがあり、スポーツチャンバラはただの叩き合い。だからそれとかの動きとかいいところを集めたりとかして自分でやっちゃったんですよ。」

すると遠めに座っていた隊員 A が興味津々な面持ちで聞いていた。

隊員 A「剣術は隊員 C に任せてください。武術は私に聞いてください。でも完璧ではないですけどね。」

隊員 A「今度剣術対空手で勝負してみよう。」

それからその話がしばし続いた。

私が隊員 A や隊員 B になぜ木屋町で飲み会を行なわないのか聞くと

隊員 A 「何でかといいますとね．それはもしベロンベロンに酔っ払っているところを見られると弱みを握られてしまうかもしれない．なんと言っても我々は顔が割れていますからね .」

隊員 B 「俺らが酔っているところを見て，パトロールしたときに『あんたらも酔っ払ってたじゃないか．だから口出しするな』って言われてもうたら元も子もないからな .」

一次会が終わり二次会はコーヒーを飲もうと言う話になり，ドリンクバーのあるファミリーレストランへと移動した .

隊員 A 「大晦日はどうしますか．実家に帰りますか．毎年カウントダウンパトロールをされていて，何をするかと言うと，初詣などで人が多いため，人員整理や，誘導などをしたり，ハジケル人がいると思うのでいろいろと問題が起こりそうなので，パトをしますって言うことなんですよ .」

隊員 B 「あれは人が多すぎて，ドミノ倒しになったら大変やし，喧嘩もあるからな．後は迷子とかあるからな．かなり大変やけど，やりがいはあるよ .」

隊員 F 「私は今回，渋谷のほうに回るかもしれないですね .」

隊員 C 「僕は行けたら行きます．とか言いながら行くんだらうな .」

隊員 A 「どうせ来るでしょ．隊員 C 君はねえ .」

と期待をこめた顔をして隊員 A が話した .

隊員 C 「それって強制でしょ .」

隊員 C が笑いながらも疑いの顔をして言った .

隊員 A 「強制はしませんよ．来て欲しいなあと思ってね .」

隊員 A が笑いながら話していた .

隊員 C 「たぶん行きますよ .」

隊員 C が半ば諦めたように笑いながら答えた .

この会話が終わるとそれぞれが自分の飲み物を取りに行き，私と隊員 A だけが残った . 私が無気になっていた疑問を隊員 A にしてみた . それは警察が 24 時間体制でのパトロールを開始した本当の理由を聞いた .

隊員 A 「ダーホンはどこまで知ってるの。実はね。最近山口組の総長が代わって、それが関東のコクセイ会を吸収してこれから各地の繁華街で幅を利かせようとしているらしいんですよ。それでタイミングよく立誠委員会が防犯について本腰になってきたところに乗じて始めたってわけなんですよ。僕は毎月隊員 B と警察に地域の情報を聞きに行ったり、情報交換を行なっているんで、こういうことがわかるんですよ。」

この後はなぜガーディアン・エンジェルスに入ったのかと言う話になった。

隊員 C 「俺はいつの間にか。入れられましたよ。」

隊員 A 「あの時はメンバー少なかったからね。」

隊員 A がフォローするかのよう話した。

隊員 F 「私は 16 歳の頃からやってたよ。ここ（ガーディアン・エンジェルス）は 16 歳からパトロールできるからね。」

隊員 E 「僕は埼玉に住んでいた時からピンクチラシをはがしたりしてましたよ。それでテレビでガーディアン・エンジェルスを見たりして、やってみたいと思って入りました。」

新人研修

ガーディアン・エンジェルスでは新人に対して、パトロールにおける基礎講習もなされる。私ともう一人新人隊員 E の二人の新メンバーが加わったことにより、特別講習が行なわれた。時間は 13 時開始であった。講師は隊員 A である。そして助手が隊員 C であつた。

講義前隊員 C は今日講義のほかに緊急事態における行動シュミレーションもあるため、様々な武器、例えばスポーツチャンバラのスポンジ棒や鎖などを持ち込んでいた。かなり極端な想定シュミレーションも行なわれるようであった。

まずは、ガーディアン・エンジェルの沿革から始まった。続いてはガーディアン・エンジェルス内のシステムである。

隊員 A 「例えばパトロールを百時間越えると『I Support the Guardian Angels (見習いパトロール)』からある程度仕事ができる一人前とみなされる『Guardian Angels Safety Patr

o 1』と言うものがあります。一応Tシャツに『S A F E T Y』と書かれているものがある程度仕事が出来ると、ガーディアン他のメンバーから見てわかりやすいんですよ。でも一般の人から見れば、このTシャツを着ていればガーディアン・エンジェルスであることしか分からないわけですから、その辺は私たちが助けるんで大丈夫ですよ。レスキュー隊にもそんなことがあるみたいですが 私たちからみれば、レスキュー隊は全員できるものと思ってしまうんですが、私は見習いだから助けることが出来ません。何てことは言えませんよね。これから頑張っていきましょう。」

次はやはりガーディアン・エンジェルスがよく自警団と間違えられるので、自警団との違いについて話した。ここまでは隊員 E が時間を勘違いしてしまい遅刻していたので、隊員 A と私とのマンツーマンの講義であった。

14時半過ぎになると、遅れてきた隊員 E が今度は隊員 A とのマンツーマン講義が始まった。内容は私と同じであるが、時間は短かった。隊員 E は終始申し訳なさそうな顔をしながら隊員 A の講義を受けていた。その間隊員 B も到着し、隊員 E が終わるまで休憩を取った。その間隊員 C は武器を手に取り、武術の練習をし、隊員 B はその武器に対して興味津々であった。

15時半頃から街頭シミュレーショントレーニングを行なった。これはDS（酔っ払い）に対する対処方法である。

隊員 A 「まずはトレーニングに入る前に、ガーディアン・エンジェルスとは、皆さんのイメージを聞いていきたいと思います。」

隊員 A 「優しい力持ち、何でも出来そう、強い、動きが俊敏、ポジティブ、あえてしないことをしてくれる、楽しそう、人助けのプロ、困ったときに力になってくれる。これらの意見が出たと言うことは、普段から一般の人たちからこのように見られていると言うことなんですよ。このイメージに近づけるように頑張っていきましょう。」

隊員 A 「まず、大丈夫ですか。と声を掛けながら近づき、足から叩く。そして、決してDSの真正面には立たないでください。なぜかと言うと、目の前に立つと吐いたものももろに食らったり、寄った勢いで殴られる可能性がありますからね。」

気を付けてください。あとは声を掛けるときに、相手に考えさせるような話しかけ方をしてください。例えば、どこから来たのか。誰と来たか。どのような交通手段を使って来たか。相手に考えさせることをしてください。また窃盗もあるので、所持品の確認をさせるなどもしてください。」

隊員 A「また、私たちは応急処置などは出来ませんが、治療は出来ません。そして、必ず goon (グン 野次馬) が来ますので、彼らを巻き込む、手伝わせると言う方法もとることが効果的だと思います。また EMS (緊急車両および隊員 主に救急車) などが細い通りに入ってこれるように人員整理と通る道の確保を行なう場合、『どいてどいて』や笛を吹いて威圧的にするのではなく、『救急車が入ってくるので、道を開けてください。』とちゃんと説明して、後なるべく目を見ながら話して行ってください。」

隊員 A が話した後、私と隊員 E が街頭想定シュミレーションを行なった。

3 考察

3.1 街路の所有者たちとガーディアン・エンジェルスのパトロールにおける違い

河原町・木屋町パトロール隊での物語において、彼らの目的は明確になっている。

それは主に放置自転車の撤去と性風俗店での街頭看板の自粛、ならびに呼び込みの禁止を呼びかけるピラを配る。これらの活動を通して木屋町、河原町の美化を進めると共にそこに住む人々に安心して安全な街づくりを目指して活動している。これらがなされることにより防犯となるという考えである。

それに対し、ガーディアン・エンジェルスのパトロールでは犯罪防止に主旨を置き、安全を提供するために行なう。街に倒れている、座り込んでいる、迷っている、因縁をつけられているなどで困っている人はいないか。町に落し物はないか。街に引ったくりはないか。街に交通事故や、起こりそうな場所はないか。街に警察に手配されている人物がい

ないか．街の中に逃げる，叫ぶ，取り囲む，潜伏する，進入しようとしている，破壊するなどの不審，奇妙な行動をとる人物，団体はいないか．街で禁止されている商取引を行っていないか．(違法薬物，売春，偽造有価証券など．)街の工事中の場所，河川，暗がり，ゴミ捨て場，空き家，古い施設などに危険はないか．街の中に新しい施設はできていないか，不審な物はないか．街の避難場所，防火，消化設備はどうなっているか．消火器はどこにおいてあるか．街の施設の破壊，落書き，ごみの投棄はないか．街に不法あるいは危険な広告看板はないか．街の人々とガーディアン・エンジェルのメンバーは楽しく対話しているか．という点に重視し，パトロールを行なっている．

3, 2 街路における防犯

J. Jacobs (1961=1977)によれば，街路¹⁾の安全について，もし都市の街路が安全ならば都市全体にも安全というものが波及し，その波及によって，人々は暴力や恐怖といったものから守られるのである．

また，Jacobs (1961=1977)によれば，まちの街路の管理に関して，まちの街路や公衆の平和は元来，警察の手によって守られるべきものではなく，元来まちの人々が自発的に統制し，ほとんど意識をしないでまちを安全に保つ仕組みを構築し，維持されなければならない．さらにその仕組みをまちの人々の手によって強化されるべきなのである．

河原町・木屋町パトロール隊においては警察と協力としてパトロールを行なっている．Jacobs (1961=1977)の述べていることに当てはめていくと，このパトロールや平成 17 年 9 月 26 日より行なわれた警察による夜間パトロールは，効果がないのではないかということになる．実際，警察の介入が始まってから，木屋町に来る人の数を減らしてしまったことが事実である．

それに対し，ガーディアン・エンジェルのパトロールでは，Jacobs(1961=1977)が述べているように人々の手によって町の平和を守ろうとしている．

それはガーディアン・エンジェルスが，普段のパトロールから行なっている，通りを歩き交うすべての人びとに対して声を掛けるという行為に表れていると考えられる．

隊員「常に声を掛けていると向こうから困った時にこちらの相談しやすくなるし，私たちガーディアン・エンジェルスは街を歩いている一人ひとりに対して，ちゃんと

見えていますよ、関心を持っていますよっていう意思表示になるんですよ。」と話している。

彼らはキャッチのみならず、声を掛けていくことに重点を置いている。

隊員 A「(河原町・木屋町)合同パトは性風俗やキャッチに対して圧力を掛けるようなもので、その方たちとパトをしていると私たちの今まで築いてきた関係が崩れてしまう。だから、私たちは中立な立場であることをわかってもらうために、私たちはビラを配らないんですよ。」

隊員 D「合同パトはやりすぎだな。あんな強引にビラ配ったら、(キャッチや性風俗店の定員)にけんかを売ってるのと同じだな。だから、Aも俺たちにビラを配らせなかったんだろうな。」

これらからわかるようにガーディアン・エンジェルスはあくまで、木屋町にいる人びとに対し、誰一人隔たりなく中立な立場でパトロールを行っている。

このような行為を Robert D. Putnam (2000) によれば、日常的な接触つまり、自分が住んでいる地域において普段から見かける人例えば、隣人やいつも通りを掃除している老人などに対して、毎日挨拶することによってお互いの存在を確認し、何かあった時に助け合える連帯感を生むことが考えられる。その連帯感がお互いに自分たちが普段いる環境を安全に保とうとする潜在的な責任感をも生み出すと考えられるのである。

つまり、ガーディアン・エンジェルスのパトロールにおいて上記の日常的な接触は、河原町・木屋町合同パトロールでの対象の呼び込みいわゆるキャッチにも言えることである。キャッチに対しての日常的な接触、声を掛けるまたは、コミュニケーションをとるという行為をすることによって地域住民と同じ扱いを行い、彼らに潜在的な責任、つまり、彼らもその通りを安全に保たせなければならないという義務を植え付けようとしている。

Jacobs (1961=1977) によれば、ノースエンドの事例において過去三十年に起こって事件は 56 件で、それは子供の遊びが過ぎたものや、女性が夜道を歩いていて暴漢に襲われた事件であった。しかし、どの事件においてもその現場に居合わせた人や、街路を見ていた物好きな人々によって未然に防がれたというものであった。つまりは、このように街路を常に監視する者ではなく、たまたま見ていたというような物見高い人々の存在によって、犯罪が未然に防がれるのである。

また街路が平和になるための条件として、Jacobs (1961=1977) によれば、第一に、パブリック・スペースとプライベート・スペースが混ざり合うことは危険に繋がることである。

第二に、街路には多数の目が必要であるということ。その多数の目は常にその通りにいる人びとであり、彼らが街路を守るべきであるということ。そして、そこに住む人々と面識のない外部の人間とが危険のない状態にするように監視するべきであるということ。

第三に歩道は常に使用されていなければならない。そうすれば常におおぜいの人びとが街路に危険はないかを注意して見ることができ、かつ街路が安全に保たれるのである。

まず、物見高い人びとがいることにより犯罪は未然に防ぐことができるという点において、ガーディアン・エンジェルスは先に説明したように人々に声を掛けることで、自らが物見高い人であるということを明確に人びとに意思表示をしていると考えられる。

木屋町をこれに照らし合わせると、パブリック・スペースは木屋町通りとキャッチ。プライベート・スペースが木屋町通りに面している店、キャッチと立て看板であるということになるということである。

上記でのパブリック・スペースとプライベート・スペースが混合することは危険となると記していたが、この場合キャッチの存在は通行人にとっては勧誘されるという不快感を与えられる弊害はあるが、夜間、常にその場所に立ち続けている日常的な存在であり、「目」となることには違いない。そして、ガーディアン・エンジェルスが彼らに声を掛けることにより、彼らのパブリック性を上げている役割を果たしていると考えられる。

そして立て看板については、たいてい電飾が施されている。そのため、人びとの目に触れることで、見た者に不快感を与えてしまうという弊害を引き起こすものも存在する。しかし、これらは街灯としての役割の一端を担っている存在であると考えられる。通りを明るくすることにより、その道を通らなければならない人びとに安心感を与えるとともに、通りに注がれる「目」の範囲が広がるのではないかと考える。

3.3 青少年の拠り所

ガーディアン・エンジェルスが声を掛けるのはキャッチや通行人ばかりでなく、子供たちにおいてもなされる。

Robert D. Putnam (2000) によれば、子供たちについて、近隣住民間での相互信頼や子供の不品行に対して進んで介入することは近隣地区間での犯罪が起こりにくい傾向にあるということを明らかにした。シカゴの研究において暴行の減少は近隣住民間での日常的な接触によって生じる結束力によってあらわれると言っている。

Sampson と W. Byron Groves による初期の研究によって、社会的なつながりは犯罪率の減少に効果があるということがわかった。また、イギリスの犯罪データについて彼らの分析によって、硬い信頼関係によって結ばれた人びとがいるところや、地域の親交に積極的な人びとがいるところでは、強盗、襲撃、住居侵入、窃盗というあらゆる犯罪の発生率が低いということがわかった。さらに、貧しさや、人々の移動が頻繁に行なわれるため犯罪が多いということではないということである。むしろ、大人が積極的にまちの親交に関わらないため、十代の監督をおろそかにすることで高犯罪率へとつながるということである。

家族もまた近隣環境へ影響を与える。北カリフォルニアでは学者たちが近隣地区において安定した家族つまり、積極的にまちの親交の向上を担っている家族である。その家族は大人の見本を示すことや子供たちの監督をする役割をするのではなく、他の家庭の子供たちと関わりあうことで、子供たちの良き友となり、その中で彼らと適合し、品行方正へと導くということである。それゆえ若者の法を犯すことを防ぐことに関係性があるのである。

ガーディアン・エンジェルズにおいてこんなエピソードがあった。

夏の深夜 1 時ごろであった。四条、三条間の鴨川において見たところ小学校高学年から小学校低学年の少年二人が川原に座り込みタバコを吸っていた。そこにガーディアン・エンジェルズの隊員が居合わせ、話しかけた。

隊員「こんばんは。何してんの。」

少年「……」

隊員「あ。」

少年「え!?」

隊員「そのエアマックスいいね。どこで買ったの。今探してるんだけど、いくらしたの。」

いい店教えてよ。」

少年「これはあそこの店で買ったんだよ。」

隊員「そっか、今度行ってみるわ。今何してんの。もう夜遅いし。」

少年「ぼーっとしてる。」

隊員「親の人とか心配しないの。大丈夫。」

少年「家に帰ってもつまないし、何にも言われないから大丈夫だよ。」

隊員「そうなんだ。でももしかしたら、こんな夜遅いから君たちが悪い人たちに何か去れないうちに帰った方がいいよ。ね、一緒に帰ろうよ。駅まで一緒に付いて行くからさ。あ、あとタバコ吸っていると背が伸びなくなっちゃうよ。」

少年「わかった。じゃあ帰ろっかな。」

このようなやり取りがあった。まず彼らはタバコを吸っていたが、そのことには深く触れず、まずコミュニケーションをとることに重点を置いている。最終的には軽くではあるが彼らの一般的に不品行とされる行為に対して介在し、彼らが犯罪の被害者や、加害者となる得る芽を摘むという行為を果たしているといえる。

河原町・木屋町合同パトロールにおいては地域住民における地域の親交、社会的なつながり、犯罪発生率の減少は認められるが、風俗店に対する抑制に重点を置いているため、若者に対する監督とまでは行かないが、目が届いていないことが現状であるといえる。

上記のパトロール中のエピソードにあるように、青少年に対してはガーディアン・エンジェルスでは「良き兄貴」というような存在であるようにとされている。それゆえ、Putnam (2000) が述べていた「よい家族」とまではいかないが、それと似た役割を果たしていると考えられる。

隊員「若い子達を（ガーディアン・エンジェルスに）引き入れることによって、どこか拗り所みたいなものを作ってあげることによって、非行に走るのを防いだりすることができるんですよ。」

というコメントがあった。このように「よい家族」までとはいかないが、それに近い状況を作ることにより、犯罪率の低下へとつなげることを行なっていると考えられる。

3.4 人びとの模範となる

ガーディアン・エンジェルスと3ヶ月間行動を共にしてきた中で、頻繁に聞かれた言葉がある。それは人の目を気にすることである。いつどこで誰に見られているかわからない

と常に隊員は話していた．そのため身なりや言動に慎重であった．

親睦会において、私が隊員 A や隊員 B になぜ木屋町で飲み会を行なわないのか聞いたことがあった．

隊員 A 「何でもかといいますとね．それはもしベロンベロンに酔っ払っているところを見られると弱みを握られてしまうかもしれない．なんと言っても我々は顔が割れていますからね．」

隊員 B 「俺らが酔っているところを見て、パトロールしたときに『あんたらも酔っ払ってたじゃないか．だから口出しするな』って言われてもうたら元も子もないからな．」

上記のコメントが印象的であった．おそらく、彼らはふだんから、自らを律することで自分たちの活動や、彼らの一つ一つの発言に対し自信と正当性を持たせようとしていたのではないかと考える．

Jacobs (1961=1977) によれば、彼がバス停で待っているとそこには今日はそこにはバスが来ないとある女性が声を掛けた．彼女は街路を注意して見ていた何万人というニューヨークにすむ人々の中の一人であった．街路に住む人びとは街路で何が行なわれているかを観察している．そして彼女のように行動を起こすことには自信が要求される．しかしながら基本的に重要なことは、街路自体を注意してみることである．

上記の彼女がとった行動は、ガーディアン・エンジェルス精神である「DARE TO CARE」あえて世話をするという行為である．これをするには Jacobs(1961=1977)の述べるように自分の行動に対して、かなりの自信が要求される．そのため、彼らはその自信に確実性を持たせるために、自信の身なり、言動を律し、人びとからの模範となるよう努めているのではないかと考える．

結論

ガーディアン・エンジェルスは、パトロールにおいて木屋町にいる人びとすべてに声を掛けるまたはコミュニケーションをとることにより、防犯へと繋がる「目」を増やす行為を行なう．また、青少年においては「良き兄貴」というような彼らの拠り所となる家族に

近い存在になることにより、犯罪の芽を摘む役割を果たしている。さらにガーディアン・エンジェルスは自身の行動を律することで人びとの模範となるよう努めることで、人びとが彼らを見ることで安心・安全を確認できる存在となることで、防犯の役割を担っていると考えることができる。

一方、河原町・木屋町パトロール隊はキャッチや性風俗店の排除のみに重点を置き、また警察に守ってもらうという方法をとった。それゆえ、本来ならば防犯に繋がる「目」の数を減らしてしまう結果となった。

以上のように Jacobs(1961=1977)が述べたとおり、街路の安全は人びとによって守られ強化されるべきであるということが証明されたと考える。ガーディアン・エンジェルスは、人々の手によって街路の安全を強化させる責任感を助長させる役割を担っていると言いうことができる。したがって、ガーディアン・エンジェルスのパトロールが有効であると証明できると言えよう。

注

¹⁾ Jacobs (1961=1977) は街路について、都市の歩道には何の意義も認められなく、何の具象性も持たないと述べている。しかし続けて、別の歩道とぶつかる時、つまり、交わることにより新しい効用が生じる時のみある意義を持つようになると述べた。街路には車を通す以外にいくつかの用途があると定義した。

文献

Robert D. Putnam, 2000, BOWLING ALONE, SIMON SCHUTER, Inc, New York .
Jane Jacobs, 1961, THE DEATH AND LIFE OF GREAT AMERICAN CITIES ,
Random House, Inc .(=1977 , 黒川紀章訳 『アメリカ大都市の死と生』鹿島出版
会 .)
日本ガーディアン・エンジェルス, 2004, 『日本ガーディアン・エンジェルス ハンド
ブック 2004』日本ガーディアン・エンジェルス .

(40字×30行) 31項 原稿用紙65枚